

『病気は不便だけれど不幸ではない』 学び・学び直しと治療と仕事の両立を

厚生労働省の「職場における学び・学び直し促進ガイドライン」（いわゆる「リカレントガイドライン」）の策定・公表（令和4年6月27日）に先立つ令和4年6月24日、認定NPO法人キャリア権推進ネットワーク（諏訪康雄理事長）は、社会人の学び・学び直しの先にある「持続可能な（サステナブルな）キャリア」をテーマに「第16回キャリア・コロッキアム」をリモートセミナー形式で開催した。

基調報告を行った株式会社ウイル代表取締役の奥山睦氏は、48歳で大学院の修士課程に入学。その後50代に入って脳梗塞と眼病を発症したが、治療を継続しながら大学院の博士課程を修了し、今年3月に博士号を取得した。まさに、その半生は、社会人の学び・学び直し、治療と仕事を両立しながら、それを自身のキャリアに昇華させてきた「ライフキャリア」の好事例であった。

同NPOの「キャリア・コロッキアム」は、経営や人事労務に関する世の中の動きの最先端に近いテーマを設定し、多彩な講師を招き、前半は基調講演・報告、後半はその基調講演・報告を踏まえたテーマを参加者がグループごとに検討して結果を発表するという体験型講座。参加者が一丸となって、人生100年時代に向かう「多様なキャリア」と「キャリア支援のあるべき姿」について勉強・研鑽する場となっている。

50代に入って脳梗塞と眼病を発症 治療継続しながら今年博士号を取得

第16回の第1部では、「キャリアが見通せない人生100年時代を生き抜くために～『持続可能なキャリア』について考えよう～」をテーマに、株式会社ウイル代表取締役であり、静岡大学大学院や情報経営イノベーション専門職大学で客員教授を務める奥山

睦氏が講師となり、自身の人生の歩みと仕事と学びを紹介しながら持続可能なキャリアに関する基調報告を行った。

横浜で鉄工会社を経営する祖父、弁護士の父、画家の母である両親のもとで育った奥山氏は、武蔵野美術大学を卒業後、23歳で書籍等の制作を行う編集プロダクションに入社、31歳で企画制作会社を起業した。

そして、46歳のときには、自身初の書籍『メイド・イン・大田区』を出版。それが契機となり大学教育に携わり48歳で法政大学大学院の修士課程に入学。55歳の時には脳梗塞を発症してしまうが、治療を継続しながら慶應義塾大学大学院の博士課程に入学。その後さらに61歳のときには眼病を発症したが、脳梗塞とともに治療を継続しながら、大学院の博士課程を修了し今年3月に博士号を取得した（31ページ参考1参照）。

また、今年4月には編著『SDGsを活かす

地域づくり—あるべき姿とコーディネーターの役割—』(2022 晃洋書房)を出版した。だが、奥山氏が大学院で研究していた期間には、自身の治療・闘病と並行して、夫の転職、息子の就職、実母・義父の死など家族も激動の時期を迎えていたという。

病気をしなければ博士号を取ろう とは思わなかった

奥山氏は、学びや仕事と家庭の両立、キャリアについて、「脳梗塞を発症して、せめて息子の就職を見届けてから死にたいと思い、脳トレのため博士課程を受けました。キャリアに関してお伝えしたいことに『病気は不便だけれど不幸ではない』ということがあります。病気をしなければ博士号を取ろうとは思いませんでした。今後はコロナで様々なことが転換に向かうと思いますが、変化への対応も重要なキャリアではと思います。『木を見て森も見る視点（部分最適と全体最適を構築する力）』（私は木が「脳トレのため」で森が「キャリアアップのため」でした）が大切ではと思います。」などと語った。

皆様とのご縁でキャリアが発展し 皆様とのご縁の中で生かされてきた

奥山氏の数多くの仕事や学びの転機には、「大学で教えてみない?」、「本を書いてみない?」、「地ビールのラベルをデザインしてみない?」などの「申し出」や「提案」があったという。そして、それを引き寄せたのは、奥山氏の明るく人懐っこい人柄などの人間的な魅力が育んできた「人とのご縁」、新たなことを素直に受けとめてポジティブ



▲今年3月28日 慶應義塾大学大学院学位授与式にて博士号を授与。

に考えられる「楽観性」であり、奥山氏の多様な人々と仕事を創造し推し進めていく「社会人基礎力」や「人間力」の高さを感じられた。

奥山氏の半生は、まさに、社会人の学び・学び直し、治療と仕事の両立を進めながら、それを自身のキャリアに昇華させてきた「ライフキャリア」(生活全般において生涯にわたり果たす役割や経験の積み重ね)の好事例といえるだろう。

奥山氏は、「博士号を取得し、このたび研究者としてやっとスタートラインに立てました。月1回の定期健診は欠かせませんが、本当は55歳で死んでいた私です。家族の存在、恩師とめぐりあって、最終的にここまで来られました。皆様とのご縁でキャリアが発展してきました。皆様とのご縁の中で生かされてきたのです。ありがとうございます。今後は地域振興につながる観光考古学の研究にも注力していきたいです。」と基調報告を締めくくった。

日本の高齢者は「学習の場の確保」 を要望する率が極めて低い

後半の第2部では、諏訪理事長から、奥山氏のライフキャリアに関して「職業生活

関連]、「家庭生活関連」、「個人の観点」に加えて、大学院入学にどのような意味があるのかという問題提起がなされた。

そして、「高齢者の要望の国際調査（2020年）」（31ページ参考2参照）を紹介し、日本の高齢者は、「学習の場の確保」を要望する率が極めて低い（日本9.7%に対してアメリカ71.8%）ことなどを指摘。その上で、持続可能なキャリアにはどのような特性があるのかについて「何が問題か?」、「なぜ問題か?」、「どうしたらよいか?」といった観点でグループワークが行われた。

勉強し続けないとチャンスが訪れた時にものにできない

参加者からは「むしろ歳をとってからの方が勉強している」、「高齢でこのような勉強会に参加しているモチベーションは何かという話をしたが、勉強し続けないと、チャンスが訪れた時にものにできないから」、「辛抱するのではなく考え方を換えよう」、「昔は大企業が仕事関係以外のことはやるな!としてきたが、今はどんどん変わってきている。本気で（学びを）やっている人と（こうした場で）どんどんつながって欲しい」などの意見が挙がり、他の参加者からの賛同を得ていた。

組織に依存しないメンタリティと生き方、そして「ご縁」を創る力

諏訪理事長は、「他人のキャリアはプライバシーの関係で知るのが難しいこともありますが、奥山先生には惜しげもなく貴重な事例を発表していただきました。サラリーマンの家庭ではなく、フリーランス的な生

き方の家庭で育ったこと。そして、組織に依存しないメンタリティ、組織に縛られない生き方、能動的な立場、ヒューマンネットワークビルディング（人のご縁を創る力）に長けていることが印象的でした。そして、極めて好奇心が強いこと、のめり込む力がもたらす学習能力の向上、どれも社会人が勉強し続けるうえで極めて重要なことです。今日の日本では、個人も力をつけていく必要がありますが、それがなぜ挫折してしまうのか、今後も考えていきたいと思います。」と同日の基調報告の感想を交えて、今後の検討課題などを示した。

次回の「第17回 キャリア・コロキウム」（令和4年9月29日18:30~20:30開催予定）は、ダイバーシティや障害者雇用をテーマに株式会社ミツいの生田目将太郎氏が基調報告を行う予定（<https://career-colloquium17.peatix.com/>）。

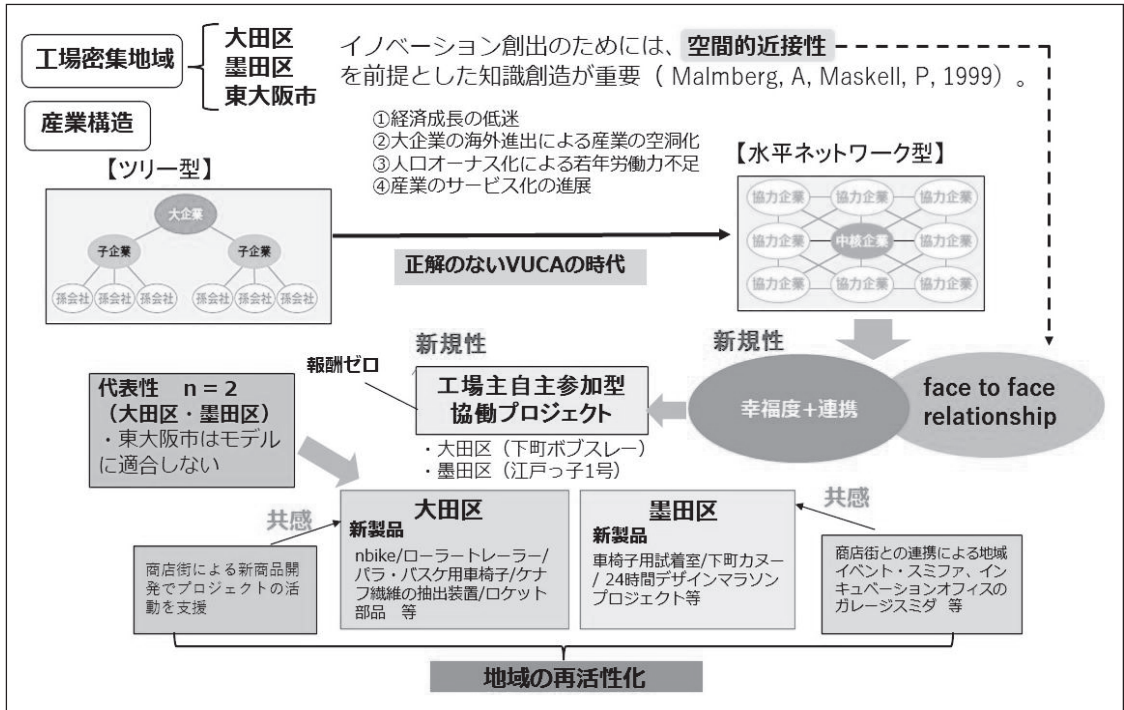
● 奥山 睦（おくやま・むつみ）

数々の地域活性化のためのプランニング・商品開発等に携わり、「福島モノづくりブランド構築研究会」委員長、経済産業省「素形材産業における女性の活躍推進に向けた検討委員会」委員等を歴任。山形県長井市を首都圏から応援する「ふるさと長井会」産業部会理事。国家資格キャリアコンサルタント、公益財団法人日本生産性本部認定メンタルサポーター。

〈現職〉

企画制作会社・株式会社ウイル代表取締役
静岡大学大学院総合科学技術研究科客員教授
情報経営イノベーション専門職大学客員教授
日本女子大学家政経済学科非常勤講師

<参考 1> 奥山氏の博士論文の全体構成



<参考 2> 高齢者の要望における違い

